

絵画の協同鑑賞における知識共有と問いの投げかけが 鑑賞行動に及ぼす効果に関する研究

山川 実羅乃

美術鑑賞経験の少ない鑑賞初心者を対象に、知識の共有と問いの投げかけを指示することによって鑑賞行動にどのような変化が起こるのかを明らかにすることを目的にペアでの鑑賞実験を行い、観察・分析を行った。

実験では、36名18組の筑波大生のペアが参加し、コントロールあり・なし条件で2つの題材(マネ「オペラ座の仮装舞踏会」、モリゾ「バルコニーの女と子ども」)をそれぞれ鑑賞した。コントロール条件では、各話者に異なる200字程度の鑑賞文と、対話型鑑賞VTS(Visual Thinking Strategies)で使用される問い「この絵では何が起こっていますか。」「どこからそのように思いましたか。」を与え、時間を制限せず会話させた。

コントロール条件により、鑑賞初心者ペアが鑑賞の満足度が向上するか、鑑賞が深まるかどうかをそれぞれ検討し、鑑賞の満足度にはコントロールは関与していないが、コントロールにより課題の実施時間がすべてのペアで増加し、注目箇所のバリエーションも有意に増加していた。また、鑑賞初心者ペアは課題遂行中に様々なジェスチャーを行っており、指差しや顔を近づける行動を互いに行うことで自身の注目箇所を相手に伝えていた。特にコントロール条件下では、構図解説文や指差しによる注目箇所の合意形成によって、複数のペアが絵画の構図に注目することができるようになっていた。

本研究でおこなった知識の共有と問いの投げかけは鑑賞初心者の絵画に対する注目範囲を広げ、鑑賞初心者の鑑賞の深まりに貢献できたと考えられる。一方で、適切な鑑賞初心者のスクリーニングや、鑑賞初心者がどのような部分に鑑賞の楽しさを見出しているのかは明らかにすることができなかった。また、1人や多人数での課題を行っていないため、ペアで鑑賞を行うことそのものによる効果は分からなかった。

今後は、サンプル数を増やした実験を行い、質問紙の内容をより充実させることによって鑑賞初心者の特徴を明らかにしていくことでより効果的な鑑賞支援が可能になると考えられる。また、実験結果に加え、鑑賞初心者の中でも直接的な知識の提供に忌避感を示す者が少なからず存在したことからも、従来の解説文とは違った、絵画の注目箇所を示すことによって自由な発想を支援することが望まれる。

(指導教員 高久 雅生)